

## 巻頭言

### アートをとおしての精神保健の啓発

本協議会主催によるアートとトークによる多様性尊重の社会づくり展「かく、みる、つなぐ-こころの軌跡をたどる」(平成 29 年 12 月 2-17 日)を開催した。この展覧会は、こころの健康問題を経験したひとたちとそのアートを中心に据え、イベントや交流をとおして、こころの健康、ひとの繋がり、社会のあり方などについて改めて考え合うことを目的としており、16 日間の会期中の展覧会への来場者数は 626 人、7 回のイベントへの参加者数は合計 240 人であった。

本協議会はこれまでアートをとおしての精神保健の啓発に取り組んできたが、今回の展覧会をとおして、私自身の理解の深まったところを述べたい。こころの健康問題を経験したひとにも、そうでないひとにも、芸術活動を続けるひとたちがある。

私たちはこころの健康問題を経験し、その中で芸術活動を続けるひとたちに出会い、彼らの生き方や作品に魅力を感じて、その展覧会を開催するのであるが、その意味は何であるか?それは、こころの健康問題を経験したアーティストたちが、自らの人生や、生き方を思い、表現をつむいでいるからである。この表現活動は、こころの健康問題の経験、医療者・支援者との対話、家族との日常、理解者との出会いなどが作用し、つらさや悲しさだけでなく、明るさやユーモアも含まれて継続される。ここに、こころの健康問題を経験したか否かという垣根を越えた、ひとをひきつける力が生まれてくる。作品をとおして、生きる営みの感覚が共有され、振り返ってみれば、こころの健康問題を経験したひとたちから教えられていること、その人生と作品を尊敬することに気づく。

今回の展覧会の最終日のイベントは「作品の社会的価値と保存」をテーマとした。豪州からシンポジストとして参加した精神科医オイゲン・コウは、周辺化されたアートを展示することの社会的インパクトについて述べた。国内からは、安彦講平氏、織田信生氏、坂井貞夫氏の活動紹介があり、服部正氏は日本におけるアールブリュットの理解と課題を述べた。また、杉山春氏、山之内芳雄氏がコメントを述べた。

アートをとおしての精神保健の啓発は、作者であるこころの健康問題を経験したひととその作品への尊敬を基盤とし、それを展覧会の中で表現することで、社会にメッセージを伝えていく具体性をもつ。この活動を各地の協会とも共有していきたい。

平成 30 年 1 月

全国精神保健福祉連絡協議会  
会長 竹島 正  
(川崎市精神保健福祉センター所長)